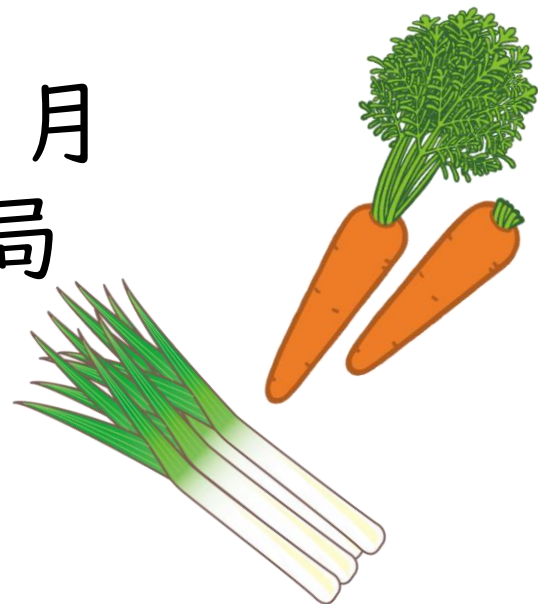
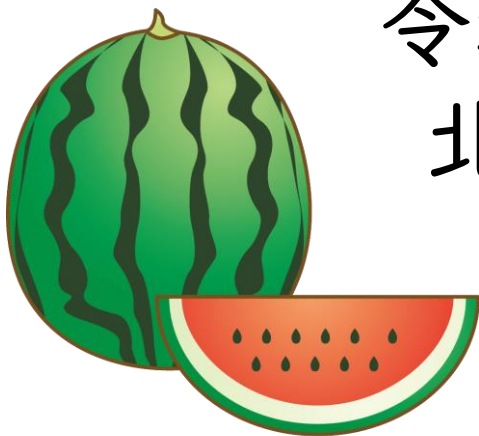











水田農業の 高収益作物導入の取組事例

令和7年3月
北陸農政局



新潟県

- ◆ 豪雪地では珍しいブルーベリー栽培に挑戦
観光農園を開園し、地域飲食店とのコラボにも挑む
関遼 (Maries Farm) (魚沼市)  p. 1
- ◆ 女性一人でハウスを新設し、園芸に取り組む自身の将来を見据えながら、
営農の継続を
大倉憂里香 (村上市)  p. 2
- ◆ いちご栽培のため、稲作を減らし省力化
将来は農園にキッチンカーを導入したい
渡辺健史 (渡辺農園) (上越市)  p. 3
- ◆ 新規でも取り組みやすい「いちじくのコンテナ栽培」
多品種栽培による販売形態の多様化も
堀川紀子 (ほんのり農園) (新発田市)  p. 4
- ◆ ひだか農園のファン作りを大切にしていきたい
斎藤日高 (ひだか農園) (新潟市)  p. 5
- ◆ 農事組合法人を立ち上げ地域の稲作を担う一方で、個人でいちごを栽培し、
安定した収入を確保
真嶋智広 (新発田市)  p. 6
- ◆ 農業を楽しみながら、地域も巻き込む
「自然薯を収穫した時の嬉しさが忘れられない」
長谷川正則 (阿賀町)  p. 7
- ◆ 地域の園芸作物を学び、多品目栽培に挑戦「自身の作物を消費者に喜んで
もらえるのが励みに」
金崎優 (小千谷市)  p. 8
- ◆ 排水対策の徹底と販売の工夫で水田転作たまねぎの収益を向上
加藤健太 (株式会社アグリード越後) (柏崎市)  p. 9
- ◆ ユリと山菜を組み合わせ豪雪地での通年園芸を実践
渡辺昌幸 (魚沼市)  p. 10
- ◆ 地元JA、関係機関と協議し、生産・販売に有利な地域の推奨品目を導入
川上譲一 (胎内市)  p. 11
- ◆ 収穫時期が重複しない園芸作物を組み合わせ栽培年間を通じて作業量を平
準化
駒澤一雄 (聖籠町)  p. 12
- ◆ さといも栽培の機械化を進めるとともに、地域の生産者グループで全国に
「帛乙女」をPR
浅井久美雄 (五泉園芸組織連絡協議会：五泉市)  p. 13

- ◆ 水稲、えだまめ、さつまいもの複合経営で、地域と連携して規模を拡大
丸山雄太郎（弥彦村）  p. 14
- ◆ 多様な果樹、いちごを栽培し、フルーツカフェと観光農園を開設
有限会社齋藤農園 齋藤真一郎（佐渡市）  p. 15
- ◆ 大型トラクターで作業を効率化年俸制で従業員を通年雇用
久保和喜（長岡市）  p. 16
- ◆ マーケットを注視しながら年間栽培計画を策定 需要を望める時期にピンポイント栽培
本間茂雄（関川村）  p. 17
- ◆ 園芸作物の栽培品目を見直し年間を通じて平準化した作業体系とし安定収入の確保へ
株式会社平野農園（胎内市）  p. 18
- ◆ ブランドいちご「越後姫」の栽培技術確立に寄与販路拡大を推進し、産地発展に貢献
本間正司（新発田市）  p. 19
- ◆ 葉たばこの廃作農地を借受け地域でさといも栽培 「砂里芋」で1億円産地を達成
小林八寿夫（聖籠町）  p. 20

豪雪地では珍しいブルーベリー栽培に挑戦 観光農園を開園し、地域飲食店とのコラボにも挑む

マリーズ ファーム
関 遼 (Maries Farm) (魚沼市)



↑マリーズファームの
ホームページはこちら

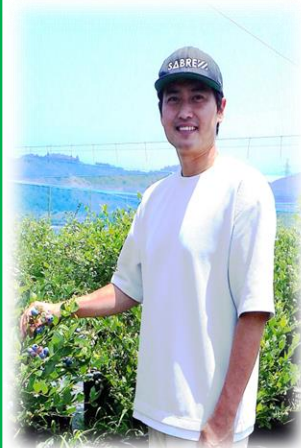
主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家は稲作の兼業農家で、子供の頃から農作業を手伝っていた。
- ◆ 大学在学中から、いずれは就農することを考えており、卒業後はサラリーマンとして働きながら、栽培品目を含め就農後の経営について検討していた。
- ◆ 水稲も検討したが、投資に費用がかかるため、園芸をやることに決め、どうせなら人がやっていないことをやろうと考えた。
- ◆ ブルーベリー栽培は、比較的手間や設備投資の費用がかからないことを知り、取り組むことにした。
- ◆ 2021年に自宅裏でコンテナ栽培を開始した。その傍ら実家の水田30aを観光農園のために整備し、同年7月に観光農園をスタートした。



ブルーベリー園と関さん

これまでの課題に対する対応等

- ◆ 就農にあたっては、新規就農者支援事業などを活用した。
- ◆ 栽培当初は、病害虫など技術面でわからないことだらけだったが、実際にやりながら自身で調べ、1つ1つ解決していった。
- ◆ 現在は、販路と認知度アップが課題である。地域の飲食店等に、ブルーベリーとのコラボ商品の提案をして、商品化した。それを地域の人にも食べてもらい、認知度アップにつなげたいと思う。

今後の展望等

- ◆ 収量の安定と販路を拡大し、規模拡大につなげたい。
- ◆ 地域で栽培する仲間を増やしたい。仲間が増えれば収量が増え販路拡大も進めやすくなる。
- ◆ キッチンカーで飲み物等の提供を考えており、農園の集客をもっと増やしたい。



たわわに実る
ブルーベリー

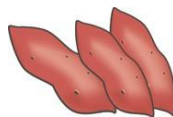
いちご栽培のため、稲作を減らし省力化 将来は農園にキッチンカーを導入したい

渡辺 健史（渡辺農園）（上越市）



↑渡辺農園のホームページはこちら

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家が10haの水稲と野菜、切花の専業農家だったが、自身は農家になる気はなかったものの、漠然と農業大学校に進学した。
- ◆ 大学時代にファームステイの研修があり、十日町市の農業法人でいちご栽培を学んだ。その法人はレストランや豆腐屋もやっており、アイデア、努力次第で農業経営の幅が広がるのが面白いと思い、農業をやってみることにした。
- ◆ 施設ではトルコギキョウや食用花、冬作でアスパラ菜等を栽培し、露地では、さつまいも、かぼちゃ、ピーマンなどを栽培している。

これまでの課題に対する対応等

- ◆ いちご栽培には、施設などの初期費用が掛かることや、栽培技術もないことから両親や近所の水稲農家に反対された。
- ◆ 初期費用は、新規就農の補助金（独立支援）を利用し、施設1棟からスタートした。現在、4棟になり、ようやく軌道に乗ってきた。
- ◆ いちご栽培に集中するため、水稲の面積を1.5haに減らし省力化を図った。
- ◆ お菓子やジェラートなどは、一部自身の加工所で作っているが、栽培との両立に苦慮している。



渡辺さんご家族

今後の展望等

- ◆ 施設内のCO2や温度、湿度の管理をITで行ったり、閉鎖型施設で作るいちごを提供したい。
- ◆ また、農園にキッチンカーを置いて、お客様に美味しいいちごを早く提供し、喜んでもらえる時間を増やしたい。



食べれるお花も栽培し、いちごとともにお菓子に

新規でも取り組みやすい「いちじくのコンテナ栽培」 多品種栽培による販売形態の多様化も

堀川 紀子（ほんのり農園）（新発田市）



↑ほんのり農園のホームページはこちら

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 結婚後、時間に融通が利き、育児、家庭と仕事の両立ができる仕事を考え、大学や大学院で土壌を学んだことを生かし、農業をやろうと決めた。
- ◆ 市内の農業法人で3年間、りんご、ぶどう、ももなどの果樹栽培を学び、自身が興味を持っていた「いちじくのコンテナ栽培」を試験的に導入してもらい勉強した。
- ◆ いちじくは消費者にとっても人気があり、栽培でも他の作物と比べ、大型機械の導入をすることなく、女性一人でも栽培管理できることから導入を決めた。



堀川紀子さん

これまでの課題に対する対応等

- ◆ 農地は農業委員会から複数を紹介してもらった。
- ◆ いちじくのコンテナ栽培には水質と水源の確保と電源が必須なので、地域の方のアドバイスを踏まえて現在の農地を借りた。
- ◆ 栽培設備は、JA新潟農業応援ファンドや市の新規就農者定着促進事業を活用した。
- ◆ いちじくの害虫であるアザミウマは、実が変質して取引に重大なリスクを伴うので、対策に白い防虫網やシートを使用している。
- ◆ 出荷先は、JA直売所、道の駅や圃場での直売を行っている。
- ◆ いちじく生産者全体の品質向上に伴った販売価格の上昇と、それに対する消費者の理解が得られたら良いと思う。



きれいに色づいたいちじく

今後の展望等

- ◆ 顔の見える販売を心がけ、何よりも地域の人に喜ばれる農園にしていきたい。
- ◆ いちじくの加工や他の果樹栽培も視野に入れながら、農福連携にも取り組みたい。
- ◆ 「いちじくのコンテナ栽培」を環境負荷の少ない、誰にでも使える栽培技術にしていきたい。

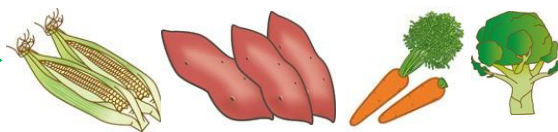
ひだか農園のファン作りを大切にしていきたい

齋藤 日高（ひだか農園）（新潟市）



↑ひだか農園のホームページはこちら

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 自身は非農家出身であったが、大学時代、全国の農家へのホームステイをきっかけに、農業が楽しくなり農業に目覚めた。
- ◆ 大学卒業後は、野菜市場を学ぶため都内のスーパーに就職して4年間務め退職し、その後、群馬県の知り合いの農家で2年間研修した。
- ◆ 新潟県へ戻り、更に2年間農家で研修し、2014年に新規就農した。
- ◆ 研修先で栽培していたカラフル人参を自身も栽培したいと思い、人参栽培から始めた。



とうもろこし畑と齋藤さん

これまでの課題に対する対応等

- ◆ 就農にあたっては、新規就農者支援事業などを活用した。
- ◆ 就農は単独でスタートし、技術も未熟、人手も売場もない状態だった。農家で研修したからといって、スムーズにいく訳ではない。技術はSNSを活用したり、農家仲間から聞くなどして参考にした。
- ◆ 比較的区画が隣接した農地を、研修先の農家やそこに出入りの業者、自治体のおかげで借りることができた。
- ◆ 人手が欲しい。人を雇用していたときは、作業の分担や新しい形態での取り組みなどのアイデアをもらい助かった。

今後の展望等

- ◆ 販売エリアを新潟市内にしぼり、ひだか農園のファン作りを大切にしていきたい。
- ◆ 今後もひだか農園の代名詞として、カラフル人参の栽培を継続していく。
- ◆ 今年新たに、家庭菜園的に野菜作りを体験できる取り組みを始めたので、更に拡充していきたい。

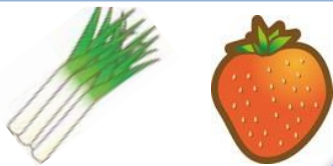


やさいの栽培体験

女性一人でハウスを新設し、園芸に取り組む 自身の将来を見据えながら、営農の継続を

大倉 憂里香 (村上市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 農業大学校でトマトを専攻、自身の育てたトマトを「おいしい」と言われ、園芸に興味が出た。
- ◆ 卒業後、稲作農家の父親の支えになるべく実家に戻り、令和元年に就農。父親と経営を分離し、新たに園芸を開始した。
- ◆ 幼い頃から農作業を手伝うことが好きで就農に抵抗はなかった。
- ◆ 現在は、露地でねぎ（春・秋）、オータムポエムを栽培するとともに、ハウスを新設し、いちごを栽培している。



いちごハウス内の大倉憂里香さん



これまでの課題に対する対応

- ◆ ねぎは天候の影響を受けやすく、特に近年は品質・収量とも安定しない。また、全量JA出荷だが価格も安定しない。
- ◆ いちごは暖房費の高騰が経営を圧迫している。
- ◆ 園芸を始める方は、畑の土質が製品の出来の善し悪しに直結することから、その畑の土質が栽培品目に適しているか否かのチェックをしてほしい。自身は就農当初取り組んだトマトがうまく行かなかった。

今後の展望等

- ◆ 良質の製品を提供すればリピータになってもらえることから、さらに栽培技術を磨きたい。
- ◆ 今後、結婚・出産・育児で農業から離れなければならない局面があると思うが、どう農業を継続していけばいいか、考えていく必要がある。



ねぎ収穫機とねぎ畑

(令和6年2月)

農事組合法人を立ち上げ地域の稲作を担う一方で、 個人でいちごを栽培し、安定した収入を確保

真嶋 智広 (新発田市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家は稲作とねぎの複合経営だったが、大学卒業後に家を継ぐか農業関係企業に就職しようか迷っていた。
- ◆ 卒業間際に、オランダで1年間の園芸研修があることを知り参加した。帰国後、平成15年に実家に就農した。
- ◆ ねぎ以外に冬場の収入源としてハウス栽培をしようと考え、近隣でいちごが産地になっていたことから、現在、8棟(26a)のハウスでいちごを栽培している。
- ◆ 一方で、地域の水田農業を担う農事組合法人を立ち上げ、農地(34ha)を集約。代表として稲作に取り組む。



真嶋智広さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 県のリース事業を活用してハウスを整備したが、初期投資が大きく、償還を終えるまでは経営が厳しかった。
- ◆ いちごの栽培方法は、隣の集落の「越後姫の育ての親」と言われる農業者から学んだ。ねぎ栽培についても指導を受けた。
- ◆ 肥料、資材、燃油が高騰しているため、コストを下げつつ収量を上げられるよう工夫してきたが、ハウス栽培で燃油をあまり使わずに栽培できるかを試している。
- ◆ 稲作は法人、園芸は個人と経営を別にしたことで、どちらも疎かにせず取り組んでいる。自身の収入の多角化・安定につながっている。

今後の展望等

- ◆ 稲作については、今後地域で離農者が増えても農地を引き受けられるよう、農事組合法人でスマート農機や大型機械の導入を進めたい。今年から始めた稲WCSも、さらに増やしていきたい。
- ◆ 園芸については、現在、研修生を地元から受け入れているが、今後海外からも受け入れたい。



ズラッと並んだいちごハウス

(令和6年2月)

農業を楽しみながら、地域も巻き込む 「自然薯を収穫した時の嬉しさが忘れられない」

長谷川 正則 (阿賀町)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 会社に勤めながら兼業で稲作をしていたが、いずれは農業を専業にしたいと考えていた。
- ◆ コロナ禍で勤務先が倒産した際、阿賀町の新規就農者支援の対象が55歳までと知り、支援対象になるうちにと、令和3年に52歳で専業農家となった。
- ◆ 水稲のほか、アスパラ、自然薯、こんにやく芋、にんじん（秋、雪下）を栽培している。



自然薯を収穫する
長谷川正則さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 稲作のみでは経営が厳しいので園芸との複合経営に取り組んだ。
- ◆ 自然薯は地元の特産品で自身でも栽培したいと思っていた。こんにやく芋は鳥獣被害が少ないと普及センターに勧められた。栽培技術は、センターやJA、地域内外の農業者に教えてもらった。
- ◆ こんにやく芋は、近隣で栽培しておらずJAの取扱いもなかったもので、長岡市のこんにやく製造会社に出荷した。地域の特産物にしたいとJAに話したところ、他の農家でもこんにやく芋の栽培が始まった。
- ◆ 初めて自然薯を収穫した時の嬉しさが忘れられない。栽培には苦勞も多いが、自身が楽しむことが大事だと思う。

今後の展望等

- ◆ 販路の拡大が課題。県の事業に応募し、重点支援対象者に選定されたので、コーディネーターの支援を受けながら、販路について学び広げていきたい。
- ◆ 自然薯の栽培面積を広げ、売上を増やしたい。自分だけでなく地域産物としても盛り上げたい。

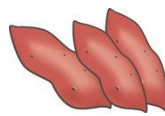
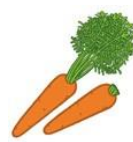


獣害防除のため電気柵は必須

地域の園芸作物を学び、多品目栽培に挑戦 「自身の作物を消費者に喜んでもらえるのが励みに」

金崎 優 (小千谷市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家が稲作の兼業農家。民間企業に就職したが、父から承継する気があるか問われ、農業をやろうと実家に戻ってきた。
- ◆ 水稻だけでは経営が厳しいと考え、園芸に取り組む農業法人で2年間研修した。小千谷は園芸の組合があるなど園芸が盛ん。地域に相談できる人がいること、栽培マニュアルがあること、研修先で学んだことが活かせることから、園芸に取り組み始めた。
- ◆ メロン、小玉スイカ、カリフラワー、にんじん、さつまいもと多品目を栽培している。自身は園芸、父が稲作と経営を別に行っているが、繁忙期には稲作も手伝う。

これまでの課題に対する対応

- ◆ 当初は失敗もあったが、実際に自分でやりながら栽培技術を習得した。見かねて指導してくれる先輩もいて非常に助かった。
- ◆ JAや国の補助金を活用しながら機械を導入し作業を軽減している。使えそうな道具をネットで探して試してみるなど、作業効率を上げるため、試行錯誤している。
- ◆ 園芸は、自分が作った作物を消費者に手に取ってもらい喜んでもらえるのが、励みになる。



金崎優さん

今後の展望等

- ◆ 通年作業の確保や人件費など課題があるが、雇用を検討したい。
- ◆ 稲作との経営統合がこれからの課題。いずれは法人化も視野に入れている。
- ◆ 栽培品目では、高値取引が見込めるメロンの栽培を増やしたい。



色々な機械を購入し試している

排水対策の徹底と販売の工夫で 水田転作たまねぎの収益を向上

加藤 健太（株式会社アグリード越後）（柏崎市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 稲作農家の祖父の後を継ぎ、平成26年に就農した。
- ◆ 粘土質が強く、稲作には向かない圃場での栽培品目をJAに相談したところ、たまねぎを提案され、平成30年から水田転作のたまねぎ栽培に取り組む。
- ◆ 同年、経営を法人化。
- ◆ 水稲20ha、大豆2ha、たまねぎ1haを栽培。



（株）アグリード越後
代表の加藤健太さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ たまねぎ栽培の初年は、期待していたより不作で、利益が想定した額を大幅に下回ってしまった。
- ◆ 翌年からは、より排水性の良いほ場に代えるとともに暗きよ・明きよの排水対策をしっかり講じたことで、収量・品質が向上した。また、販路も直売所や飲食店への直接販売にシフトしたところ、利益も増加した。
- ◆ 令和元年からは、女性役職員の発案で、たまねぎ収穫体験イベントを開催している。具体的には「10kg入り収穫用ネットを購入し、たまねぎを詰め放題」という内容で、お客様は楽しみながら割安にたまねぎを購入できる一方、当社は収穫の手間、調製や販売に必要な人件費が削減できるという、双方にメリットがある取組。

今後の展望等

- ◆ 農業者の高齢化は自社の地域でも深刻な問題。今後自社に農地が集まってくることが想定されることから、作期分散を念頭に多様な品目を導入し、地域農業の受け皿として体制を整えていきたい。



育苗ハウスの前で

ユリと山菜を組み合わせ 豪雪地での通年園芸を実践

渡辺 昌幸 (魚沼市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 会社勤めをしていたが、自分で仕事を回していけるといって農業に魅力を感じ、実家が花き農家であったこともあり、平成11年に就農した。
- ◆ 就農後、それまでの露地栽培に加え、ハウス栽培（ユリ8a×春秋2回、ふきのとう40a）を取り入れた。現在、ユリ、シャクヤク、ふきのとうを栽培している。



渡辺昌幸さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 当初はとまどうことも多かったが、地元の花き園芸組合の青年部に参加し、他の農業者などから刺激を得たり、他産地を視察したりして、少しずつ技術を習得した。普及センターや先輩農業者などからもたくさん助けてもらった。
- ◆ ユリは、ハウス栽培で春と秋に出荷し、露地栽培で7月から11月まで出荷。12月から4月はふきのとうの出荷作業を行う。
- ◆ ユリはデリケートなため、出荷はすべて手作業。品質低下の懸念から、機械の導入は考えていない。
- ◆ 繁忙期はアルバイトを雇用しているが、人により得手不得手があり、仕事の差配が難しい。高齢化も進んでいるが、長期の経験がないと難しい作業が多く、新規の雇用が課題。

今後の展望等

- ◆ 球根価格が高騰している一方で花の市場価格は厳しいが、1日でも長くこの仕事を続けていきたいし、1円でも高く1本でも多く買ってもらいたい。
- ◆ 組合では、後継者のいない経営者に、新規就農者への継承に取り組んでいる。努力次第で収益を上げられるので、関心がある人には挑戦してほしい。

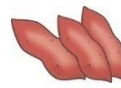


ユリのほ場

地元 J A、関係機関と協議し、 生産・販売に有利な地域の推奨品目を導入

川上 譲一（胎内市）

主な園芸作物



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 県外の農業大学を卒業後、1年間オランダで施設園芸を学び平成4年に親元就農。
- ◆ 就農当時は、水稻、葉たばこのほかに園芸作物（だいこん、ごぼう、切り花）を栽培。以降、栽培品目を拡大（さつまいも、加工用にんじん、秋冬生食にんじん）した。
- ◆ 令和3年に葉たばこを廃作し、加工用だいこん、ブロッコリー、春夏生食にんじんを追加した。
- ◆ 冬期は、ハウスで切り花（アイリス、チューリップ）を栽培している。

※イラストはイメージ



川上譲一さん
との意見交換

これまでの課題に対する対応

- ◆ 葉たばこの廃作にあたって、地元 J A や関係機関と葉たばこに代わる栽培品目を検討し、販売に有利な地域の推奨品目である加工用だいこん、ブロッコリー、春夏生食にんじんの栽培を開始した。
- ◆ 加工用だいこんへの転換には、県の園芸拡大農地フル活用事業を活用し、地域の農業者と共同でだいこん収穫作業機械を導入し作業の軽減を図った。
- ◆ 加工用だいこんは地元の漬物会社へ、また、加工用にんじんは大手の野菜ジュース会社へ、それぞれ J A を介して販売している。
- ◆ 冬期は、ハウスで切り花を生産するとともに、秋に収穫したさつまいもを一定期間貯蔵後、双方とも J A へ出荷し収入確保している。

今後の展望等

- ◆ 地域と連携し、園芸作物の団地化や I C T 等の活用により作業の軽減を図りたい。
- ◆ J A と連携し G A P 認証の取得を検討したい。



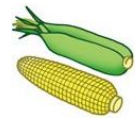
砂丘畑で生育中の
さつまいも

（令和5年3月）

収穫時期が重複しない園芸作物を組み合わせることで栽培年間を通じて作業量を平準化

駒澤 一雄（聖籠町）

主な園芸作物



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 昭和53年、葉たばこ、園芸作物、水稻の複合経営を営む実家に親元就農した。
- ◆ 平成元年、葉たばこを廃作し、さくらんぼと根菜類（さといも、ごぼう）の生産に切り替えた。
- ◆ 平成13年、冬期に作業できるいちごのハウス栽培を開始した。

※イラストはイメージ



いちごの手入れをする駒澤一雄さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 良質な農産物生産には、土づくりが基本。緑肥用とうもろこしを植え、すき込むことにより連作障害対策、せん虫抑制対策を講じるとともに、緑肥に併せて堆肥を施用している。
- ◆ 収穫時期が重複しない園芸作物を計画的に組み合わせることで、年間を通じて作業量を平準化している。水稻に加え、ハウスいちご（2月～6月）、さくらんぼ（5月～6月）、とうもろこし（6月～7月）、さといも、ごぼう（11月～3月）を栽培している。
- ◆ さといもはJAに出荷。ごぼう、いちご、とうもろこしはJA出荷と直接販売している。
- ◆ さくらんぼについては、直接販売とJA出荷に加え、さくらんぼの木オーナー制も導入し、消費者と直接契約している。

今後の展望等

- ◆ 費用対効果を分析しつつスマート農機を導入し、作業を軽減したい。
- ◆ 圃場整備には2割の園芸導入が要件となる。園芸作物が定着するよう、新たに園芸作物の栽培を始める農業者に栽培技術を指導し、地域農業を活性化させたい。



収穫を終えたさくらんぼの木

（令和5年3月）

さといも栽培の機械化を進めるとともに、 地域の生産者グループで全国に「帛乙女」をPR

浅井 久美雄（五泉園芸組織連絡協議会）（五泉市）

主な園芸作物



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 昭和56年、水稲と野菜、花きの複合経営を営む実家に親元就農。
- ◆ 昭和57年に園芸の地域連絡会（現在の園芸組織連絡協議会）が結成され、令和4年度から会長を務めている。
- ◆ この間、五泉産さといもは「帛乙女」と命名・商標登録され、地域を挙げてブランド化に取り組んできた。
- ◆ 現在は、水稲15ha、さといも80a、ばれいしょ40a、にんじん20aを栽培。

※イラストはイメージ



さといもの農機具と
浅井久美雄さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ さといもは連作障害が発生しやすいことが課題。このため、他の作物とのローテーション栽培やごぼう生産者との圃場交換により連作を避け、収量の確保と品質の向上を図っている。
- ◆ 定植、土寄せ、収穫（掘り起こし）に機械を活用し、作業を効率化。一方、収穫後のさといもの調製は、傷をつけないよう細心の注意を払いながら手作業で行う。秋から翌春まで調製作業と出荷が続く。
- ◆ 地域連絡会では、首都圏等へ大鍋を持ち込み芋煮会を開催するなどして、五泉産さといもの知名度向上に取り組んできた。現在も連絡協議会の会長として、帛乙女のPRのために全国を訪問している。

今後の展望等

- ◆ 帛乙女を原材料とした焼酎が酒造会社により商品化されたが、さらに、スイーツ（アイスやヨーグルト等）の原材料として帛乙女を販売したい。
- ◆ 市場から帛乙女を増産してほしいとの要望が多いので、担い手の確保と作付規模の拡大を進め、帛乙女を全国に届けたい。



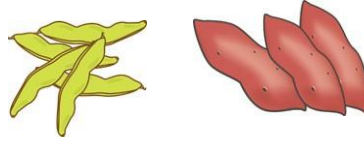
手前：定植機、後方：土寄せ機

（令和5年3月）

水稲、えだまめ、さつまいもの複合経営で、 地域と連携して規模を拡大

丸山 雄太郎（弥彦村）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成24年、水稲の兼業農家だった実家に就農。水稲だけでは収入に限られるため、えだまめとの複合経営を開始した。
- ◆ 現在は水稲5ha、えだまめ（弥彦むすめ）を2.5ha作付。えだまめの販売はJA出荷が7割。その他は地元旅館や消費者等に直接販売している。
- ◆ 弥彦村野菜部会副会長も務め、村が特産化を計画しているさつまいもの生産も少量だが開始した。



えだまめ畑と丸山雄太郎さん



えだまめ選別機を操作

これまでの課題に対する対応

- ◆ 「地元で若い人が頑張るなら」と、周囲の農業者が技術指導等で協力をしてくれ、徐々にではあるが、規模を拡大できた。
- ◆ えだまめも含めた弥彦の魅力を発信するため、You Tubeチャンネル（YAHIKOFAN）を立ち上げた。

今後の展望等

- ◆ 村が設置したえだまめ選果場の活用も視野に入れて、5ha程度まで規模拡大を目指す。
- ◆ 村が特産化を計画しているさつまいもの生産も徐々に規模拡大し、収益アップを目指す。



ほ場で育つえだまめ

多様な果樹、いちごを栽培し、 フルーツカフェと観光農園を開設

有限会社齋藤農園 齋藤 真一郎（佐渡市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成5年、JAを退職し、水稻・柿の複合経営を営む実家に就農。
- ◆ 平成8年に経営の幅を広げるためハウスを導入し、いちご（越後姫）の生産を開始。平成11年に地域農業の中核となるべく法人化。
- ◆ 平成27年に農園の果物をジュースや氷菓で楽しめるフルーツカフェを開設するとともに、いちごの観光農園を開始。
- ◆ 現在は、水稻栽培と並行し、露地でおけさ柿のほか、もも（ネクタリン）とりんご、ハウスでぶどう（シャインマスカット）といちごをそれぞれ栽培。



いちごを収穫する
齋藤真一郎さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 園芸作物の規模拡大には、労働力の確保が課題であったが、地元の高齢者に作業してもらうことで対応した。また、福祉事業所を通じ、農福連携にも取り組んでいる。
- ◆ 地域農業の後継者育成のため、農業研修生を受け入れ、園芸作物の栽培技術の指導を行っている。



たわわに実るおけさ柿

今後の展望等

- ◆ 佐渡島内の柿の生産量が減少していく中、産地を守るべく地域ぐるみでGI登録を目指す。
- ◆ 観光農園型の施設栽培を規模拡大し、観光客がおけさ柿をもぎ取り、持ち帰り、自身で渋抜きを行うスローフードを意識した農園を目指す。
- ◆ ハウスにおける栽培管理にスマート農機（環境制御装置等）を導入し、労働力の軽減を図りたい。



いちご狩りにも適した
高床ハウス

大型トラクターで作業を効率化 年俸制で従業員を通年雇用

久保 和喜（長岡市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 農業者大学校に在学中、研修先の他県の小ねぎ農家が年間1億円を売り上げていることを知り、自分も園芸で1億円を稼ぎたいと決意した。
- ◆ 平成20年、水稻中心だった実家に親元就農し、ハウスでの小ねぎ栽培を開始。以降、園芸作物の作付を拡大。
- ◆ 現在は、水稻16ha、大豆2haのほか、露地（約10ha）でえだまめとその後作でキャベツ、長ねぎ等を栽培。また、ハウス（10棟：30a）で、小ねぎ、トマト、キュウリ、アスパラ菜を栽培している。



ハウスの中の
久保和喜さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 水稻栽培と園芸の両方に使える大型トラクターを導入。ロータリーを使わないプラウでの耕耘やレーザーレベラーによる均平、肥料・農薬散布、畝立て、マルチ張りなどにトラクターをフル活用し、作業を効率化するとともに安定した収穫量を確保。
- ◆ 肥料価格の高騰に対処するため、肥料メーカーと相談しながら、輸入業者と直接価格等を交渉。
- ◆ 出荷時の梱包を段ボールから鉄コンテナに変更し、資材費等の削減に努めている。
- ◆ 家族以外に3名を通年雇用。冬場の施設栽培にはコストがかかるため、1～3月の間は栽培をせず、そのぶん繁忙期に長く働いてもらっている。給料を年俸制とし、冬場も従業員が生活に困らないようにしている。

今後の展望等

- ◆ 地域に適した園芸作物を導入し規模拡大を目指す。
- ◆ 今年度導入した栽培管理システムを活用して、生産コストを軽減し収益を上げたい。
- ◆ 新規就農を目指す研修生を受け入れ、農業技術を指導し、地域に新規就農者を増やしたい。



外国製130馬力の
トラクター

マーケットを注視しながら年間栽培計画を策定 需要を望める時期にピンポイント栽培

本間 茂雄（関川村）

主な園芸作物



※イラストはイメージ



芽出し中のユリの球根



植え付けした球根

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 農業高校を卒業後、会社に勤めながら兼業農家を営んでいたが、地域の担い手を目指し、平成9年に脱サラし専業農家となった。
- ◆ 当初は、稲作経営を主で行う予定であったが、転作の必要があったため、普及センターからの勧めで転作水田でユリの切り花栽培を始めた。

これまでの課題に対する対応

- ◆ ナリの切り花は、栽培管理が難しく、普及員に相談しながら栽培方法を習得していった。
- ◆ 施設ハウスの室温調整に重油暖房を使用しているため、燃料費が高んでいたが、薪ストーブを併用して暖房費の軽減に繋げ、平成27年からヒートポンプも併用して燃料費の削減に努めている。
- ◆ ナリの切り花は、水はけのよい土壌を好むため、圃場の天地返しやもみ殻を使用して暗渠を施し排水対策を行っている。また、緑肥栽培（ソルゴー）に取り組み土づくりを行っている。
- ◆ ナリの切り花の生産は、年間の祝休日の配置、イベントなどを見据えた年間栽培計画を策定し、ピンポイントで高値の時期に出荷できるように計画的な生産に努めている。
- ◆ 首都圏においては、ユリの切り花の需要が高く、東京の市場へ出荷することで高値で販売することができ、収益向上に繋げている。

今後の展望等

- ◆ 栽培技術レベルを上げて市場が求める良質なユリの切り花を生産したい。
- ◆ 園芸作業は重労働なので、施設機械等の導入により作業を軽減化したい。



栽培中のユリの花

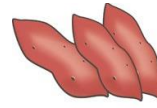


ハウスの暖房設備

園芸作物の栽培品目を見直し年間を通じて平準化した作業体系とし安定収入の確保へ

株式会社平野農園（胎内市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 祖父が終戦前まで漁師を営んでいたが、終戦後に漁師を辞め、園芸（葉たばこ、球根栽培）を開始していた。
- ◆ 農業大学を卒業後に、実家や地域の農業を守ることを考え、平成15年に親元就農した。



これまでの課題に対する対応

- ◆ 葉たばこについては、近年の異常気象による高温に伴い、高温障害で栽培管理が難しくなっている。夏場は必要以上にかん水を行わない栽培がスタンダードであったが、高温障害防止のため、かん水のタイミング、散水量を調整して栽培している。
- ◆ 先代が栽培していた園芸作物を継承しつつ、通年の作業体系、栽培品目の見直しを行い、葉たばこ（春～夏）、さつまいも（夏～秋）、だいこん（夏～冬）の栽培とした。このことにより通年の作業体系を平準化し、また、冬場にさつまいもを販売することで冬期間の所得確保に繋げている。
- ◆ 地域の高齢農業者が離農し耕作放棄地が増え、農地を借受け規模拡大していく中、地域の担い手として平成30年に法人化した。

今後の展望等

- ◆ 耕作放棄地を活用し、さつまいも、だいこん等の園芸作物を拡大したい。
- ◆ 現在、自分が中心となり農業機械のオペレーター作業を行っているが、今後は、従業員に対し、農業機械の操作技術の向上を図りながら、ライフワークバランスを取り入れ、従業員の作業分担、全作業体系の見直しを行い、地域の担い手として営農していきたい。



栽培中のさつまいも畑で代表の平野信幸さん

ブランドいちご「越後姫」の栽培技術確立に寄与 販路拡大を推進し、産地発展に貢献

本間 正司（新発田市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 昭和58年からいちご栽培をスタート。当時、栽培していた品種は収穫期間が短く、水稻の作業とも重なって負担が大きかった。
- ◆ その後、食味の評価が高く、長い期間収穫できる系統のいちご（後の「越後姫」平成8年品種登録）に将来性を感じ導入を決めた。
- ◆ いちご栽培のほか、1 haの畑で学校給食用向けに、ねぎ、はくさい、だいこん等を栽培している。



本間正司さんと
高設栽培システム

これまでの課題に対する対応

- ◆ いちごは露地育苗を行っていたが、ポット育苗を導入したことにより苗質の改善に繋がった。
- ◆ 収穫作業の労力軽減のため、土耕栽培から高設栽培へ切り替え、作業負担の緩和と同時に着果が安定し収量が増加した。
- ◆ いちごの収量が増えるにつれ、選果選別で手が掛かるようになったことから、稲作を止め、いちごと野菜の栽培に重点を置いた。
- ◆ 新潟県の「越後姫の育ての親」と評価されるようになり、地域のいちご産地の継続的な発展に向け、新規就農を目指す者の研修を受け入れるなど、後継者の育成に努めている。



いちごのランナー



栽培中のいちご苗

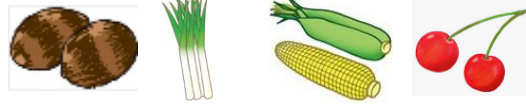
今後の展望等

- ◆ 越後姫は、価格変動があまりないため、収入の計算をしやすく、引き続きいちご栽培を軸とした農業で、いちご栽培の後継者を育成し、楽しみながら末永く営農を続けていきたい。

葉たばこの廃作農地を借受け地域でさといも栽培 「砂里芋」で1億円産地を達成

小林 八寿夫（聖籠町）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 先代から稲作とさくらんぼの複合経営をしていた。県外の落葉果樹農業研修所で果樹栽培を学んだ後、昭和54年に親元就農した。
- ◆ 平成元年にねぎ、とうもろこしを、平成17年にさといもの栽培を開始した。
- ◆ 更に、令和元年には、地域の葉たばこ廃作地（砂丘畑）を借受け、さといも栽培を拡大した。



栽培中の砂利芋と
小林八寿夫さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 地区（JA北越後管内）のさといもの生産者でJA北越後さといも部会（会員20名）を結成し、砂丘畑で栽培するさといもを「砂里芋」と名付けてブランド化し全国へ販売している。現在、さといも部会の部会長を担っている。
- ◆ さといも部会では、砂里芋の出荷は全量JAへ出荷しているが、JAを通じて、（株）イトーヨーカードーの「顔の見える野菜」に登録し販路拡大を図っている。
- ◆ さといも部会全体で令和2年に1億円の販売実績を達成した。
- ◆ 砂里芋は、乾燥するとカルシウム欠乏を起こし生育障害になり品質低下するため、スプリンクラーをこまめに活用し慎重に水管理を行っている。
- ◆ 病害虫対策は、地区全体で徹底し管理に努めている。
- ◆ 年間を通じて収益が得られる複合経営として、収益が得られる品目を選定し、さくらんぼ（5～6月）、とうもろこし（7～8月）、水稲（9～10月）、ねぎ（8～11月）、砂里芋（11～3月）と分散する体系としている。





今後の展望等

- ◆ さといも部会は、砂里芋の品質管理、栽培時の安全確保、販売拡充のためJAと共同でJGAPの第3者認証を令和4年9月の団体取得に向けて目指している。



砂丘畑で育つ砂利芋

（令和4年3月）

- ◆ 園芸施設を導入した複合経営 経営改善を前向きに楽しみながら、地域農業の活性化を目指す
神明おのがわ農園各川豊章（富山市）  p. 1
- ◆ 水稲生産と観光農園に取り組む企業集落営農法人
モモ、リンゴに加え、施設イチゴの導入による観光農園化
農事組合法人たてやま営農組合（立山町）  p. 2
- ◆ 規模拡大と経営の複合化に取り組む大規模1戸1法人
施設イチゴを導入し、周年での収益の確保
有限会社アグリゴールド矢木（入善町）  p. 3
- ◆ ワイン用ぶどうの産地化を目指す生産組合
水田転換畑で醸造用ぶどうの栽培を開始
余川ぶどう生産組合（氷見市）  p. 4

園芸施設を導入した複合経営

経営改善を前向きに楽しみながら、地域農業の活性化を目指す

神明おのがわ農園 各川 豊章（富山市）

水稲以外の主な園芸作物等



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 東京の大学を卒業後、不動産会社に勤務していたが、平成27年に地元に戻りUターンし、2年間の研修を経て平成29年に35歳で両親から水稲と露地野菜を引き継ぎ、経営を安定化するため、施設園芸で小松菜を導入した。
- ◆ 現在の経営農地面積は水稲4.2ha、小松菜をハウス8棟（15a）を父と妻の3人で家族経営している。
- ◆ 小松菜は冬場を含めハウスを年間6回転させることで収穫量は16tと大きな収入源となっている。



各川代表の顔がプリントされたパッケージ



各川さんのハウス内で生育した小松菜



ハウス内で小松菜を収穫する各川代表



見学に訪れた高校生に説明する各川代表(右から3人目)

これまでの課題に対する対応

- ◆ 小松菜を栽培しているほ場は、水はけが非常に悪いため、独自にハウス周辺に溝を掘る工夫をした。
- ◆ 当初は、全量を市場に出荷していたが、相場が大きく変動するため、売上げが安定せず、自分の顔のイラスト入りパッケージを発売して差別化を図った。
- ◆ 小売店にも飛込みで営業をかけて契約を獲得して、現在は、収穫量の9割以上を、小売店や直売所など市場を通さない形で直接販売している。
- ◆ 収量・単価の向上、農機整備の内製化、調達資材の選別、コストパフォーマンスを考慮して作業工程を見直し、収益の改善と支出の削減を地道に進めた。

今後の展望等

- ◆ 水稲栽培の一層の効率化に取り組むとともに、水稲の作付面積の拡大を図る。
- ◆ 更なる経営安定を図るため、小松菜以外の園芸作物の栽培に取り組み、収益の多角化を目指す。



神明おのがわ農園の各川代表

水稲生産と観光農園に取り組む企業的集落営農法人 もも、リンゴに加え、施設イチゴの導入による観光農園化

農事組合法人 たてやま営農組合（立山町）

水稲以外の主な園芸作物等



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成8年2月に集落営農組織を設立し、同年11月に法人化した。水稲育苗センターを整備し、水稲育苗が一つの事業部門として開始。
- ◆ 現在、集落の農地面積のほぼ8割を集積しており、経営農地面積は49ha（稲作30ha・飼料用米4.6ha・大豆12ha・サトイモ0.9ha・果樹1.2ha）、面積拡大ではなく高単収品目の導入によって経営の安定を図る。
専従者6名（常勤役員1名、常時従事者5名）
- ◆ もも（7～8月）、りんご・里芋（10月～11月）、施設イチゴ33a：3棟（12～5月）の直売、観光農園化で周年売上を実現。
- ◆ 複合経営により年間雇用の実現と安定した収入の確保。



施設イチゴ



もも

これまでの課題に対する対応

- ◆ 常時従事者を安定して確保するためには冬期の仕事と収入確保が必要なことから、園芸部門を導入した。
- ◆ 冬期の仕事を確保するため、いろいろな園芸の品目に取り組んだが、採算が合わない判断したらずぐやめた。その結果、様々な物を栽培してきた経験がイチゴ栽培に繋がっている。
- ◆ ハウス園芸は初期投資に資金がかかるため、自己資本の充実が必要である。
- ◆ 品目毎の収益を出し、利益の高いものは労働力もかかることを従業員や構成員と共有し認識を同じにした。

今後の展望等

- ◆ 複合経営による経営の安定化・高収益化を図ることができたので、今後も維持・継続に努めたい。



直売所

規模拡大と経営の複合化に取り組む大規模 1戸1法人 施設イチゴを導入し、周年での収益の確保

有限会社 アグリゴールド矢木（入善町）

水稲以外の主な園芸作物等



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成7年に新規就農し、水稲・キャベツで経営を開始。平成11年から12年にかけて冬期間の雇用の観点と育苗ハウスの有効利用からハウス白ねぎの栽培を開始。平成12年、従業員の雇用に伴う社会保障の充実等のため、農業経営の法人化を行った。
- ◆ 平成26年に施設ミニトマトで複合経営を開始。平成30年からの米政策改革に向け、本格的な複合経営の基礎作りに努めた。
- ◆ 平成29年に施設イチゴを導入し、ハウス白ねぎ、施設ミニトマト、施設イチゴで冬期間の仕事を確保し、周年での収益を確保した。
- ◆ 現在は、水稲 101ha、大豆 56ha、ハウス白ねぎ 50a（7棟）、施設ミニトマト9a（2棟）、施設イチゴ 9a（3棟）を栽培。
※ミニトマト、イチゴは施設面積
専従者13名（常勤役員4名、常時従事者9名）



有限会社
アグリゴールド矢木



白ねぎ



施設ミニトマト

これまでの課題に対する対応

- ◆ 農業者のつながりや「人の和」が経営発展に結びついている。
- ◆ ほ場をきれいに管理（借りた農地に雑草を繁茂させない等を徹底）することで、地域の信頼を得ることに結びつく。
- ◆ ミニトマトの栽培管理が容易な養液栽培システムの導入により、周年栽培の環境を整備し、出荷期間の拡大を図った。
- ◆ ミニトマトの販路について、地元温泉街へプロモーション活動を行い販路の拡大に取り組んだ。
- ◆ ミニトマト・イチゴについて、GLOBALG.A.P.認証を取得し、社内の意識高揚と社外からの信頼向上に努めた。

今後の展望等

- ◆ 地域の法人と連携・協働しながら、規模拡大を図り、地域農業の持続的発展を目指す。

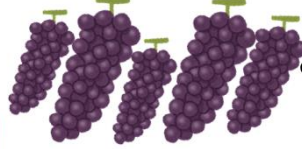


イチゴの摘み取り体験

ワイン用ぶどうの産地化を目指す生産組合 水田転換畑で醸造用ぶどうの栽培を開始

余川ぶどう生産組合（氷見市）

水稲以外の主な園芸作物等



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 令和3年12月に「余川ぶどう協議会」が計画を策定。農地の有効活用、雇用の創出、地域の活性化等を目指してワイン用ぶどうの栽培に着手。
- ◆ 令和4年11月、組合員12名で、醸造用ぶどうの産地化に向け、約1.9haの面積に3品種、約4,500本の苗木を植栽。現在は剪定、草刈り、防除を実施し、樹形育成に取り組む。
- ◆ 白ワイン用のシャルドネ種2,100本とアルバリーニョ種1,200本、赤ワイン用のサンジョヴェーゼ種1,200本を栽培。



組合員の皆さん



苗木の植栽作業



植栽後のぶどう畑








これまでの課題に対する対応

- ◆ 水田をぶどう生産用の畑に転用するために額縁排水工事を行い、水はけをよくした。
- ◆ ぶどうの根張りを深くするため、セスバニア（深根性の植物）を植え、栽培しやすい土壌に改良。
- ◆ 組合員全員が果樹栽培初心者だが、高品質の原料を生産し、県内外の多くの方に味わってもらおうことを目標に、地元のワイナリーから指導を受け、栽培技術の向上に努める。

今後の展望等

- ◆ 令和8年には、ぶどう収穫量約9トン（ワイン約7,000本）を目指す。
- ◆ 将来は、ぶどうの生産からワインを醸造・販売までを行う6次産業化に取り組み、地域の雇用創出につなげたい。
- ◆ プライベートブランドのワインはネーミングを公募したい。

石川県

- ◆ 水稲と施設園芸の複合経営 水稲育苗と花卉園芸によるハウスの周年利用
桶谷誠（加賀市）  p. 1
- ◆ 水稲と施設園芸の複合経営 需要に応じた高収益作物栽培
有限会社黒澤農場（白山市）  p. 2
- ◆ 水稲を中心に+園芸作物で経営の発展を目指す能登の農地を守る営農活動
北能産業株式会社（能登町）  p. 3
- ◆ 水稲と施設園芸の複合経営 チンゲン菜のハウス栽培で収入確保
有限会社アグリタウン（宝達志水町）  p. 4
- ◆ 水稲と畑作物の複合経営 白ねぎ栽培で定期的な収入を確保
株式会社ヤマジマ（白山市）  p. 5
- ◆ 需要を重視し「かぼちゃ」の生産に意欲 2本蔓仕立ての同一方向伸長により収穫位置を固定化
農事組合法人たなかふぁーむ（七尾市）  p. 6
- ◆ 「加賀丸いも」と水稲の複合経営 南加賀地区丸いも生産協議会でGI産品登録
有限会社岡元農場（能美市）  p. 7

水稲と施設園芸の複合経営 水稲育苗と花卉園芸によるハウスの周年利用

桶谷 誠（加賀市）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 農業で生計を立てる大きな目標を抱き、2007年にサラリーマンを辞め親元就農し、水稲と施設園芸（いちご栽培）を開始。
- ◆ 現在の経営規模は、水稲約10ha、大豆約2ha、ビニールハウス7棟（約30a）で水稲育苗及び葉ボタン（4棟）・フリージア（3棟）、露地野菜約2haでブロッコリーを栽培。
- ◆ 主な労働力は、夫婦2名。花卉の出荷時期にパート従業員1名を雇用。



ハウス内での桶谷夫妻



ビニールハウス群



葉ボタンのハウス栽培



葉ボタン

これまでの課題に対する対応

- ◆ 知人のパティシエに頼まれ、就農当初は7棟のビニールハウスを建てて、ケーキ用のいちご栽培を開始したが、水稲育苗の依頼があり、一部のハウスで育苗を始めたところ、地域の中小規模農家からの依頼が年々増加したことから、全てのハウスを水稲育苗に転換した。
- ◆ 水稲育苗期以外は、葉ボタンとフリージアを栽培するとともに、フリージアの球根の養成、葉ボタンとブロッコリーの苗作りも自家で行うことで、コスト削減につながり、所得はいちご栽培を上回った。

今後の展望等

- ◆ 水稲育苗は、地域の小規模農家からの受託であり、地域農業を維持するため、依頼は可能な限り受託したい。
- ◆ 10年後には、利益に拘らずに地域貢献に尽力したいと考えており、その頃には、自らの経営が自立し安定した状態になりたい。



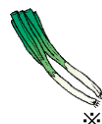
フリージアのハウス栽培

（令和3年11月）

水稲と施設園芸の複合経営 需要に応じた高収益作物栽培

有限会社 黒澤農場（白山市）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 父親の代は水田で水稲、大麦、大豆をブロックローテーションで作付けしていたが、自分が就農した時に高収益作物の栽培を取り入れ、現在では水田と施設園芸及び露地野菜での複合経営を行っている。
- ◆ 経営規模は、水稲約60ha、大麦・大豆約7ha、施設園芸はビニールハウス約60棟（約2.2ha）で小松菜、水菜、ほうれん草、露地約6haでネギ、スイートコーン、キャベツを栽培。
- ◆ 主な労働力は、役員3名、正社員4名、パート従業員20名、外国人実習生4名。



ハウス内での黒澤社長



ビニールハウス群



小松菜の袋詰め作業



小松菜を県外高級スーパーへ出荷

これまでの課題に対する対応

- ◆ 消費者に最高品質の品物を自信を持って届けたいという思いから、自ら販売先を選択し、県外の高級スーパーとの長期契約を結んでいる。
- ◆ また、県内卸を通じて、学校給食向けの食材として小松菜を全て当農場産にする契約を結んでいる。
- ◆ 大豆栽培において単収250kg超えの土壌条件を整備する技術を生かし、野菜栽培における排水対策や酸度矯正の土づくりを実践。

今後の展望等

- ◆ 高品質野菜の生産に取り組み、「黒澤農場」ブランドを確立したい。
- ◆ 有機肥料に限りなくシフトチェンジしながら、農薬も減らしていくなどSDGsやみどり戦略を意識し、環境に優しい農業を目指していきたい。



露地の長ネギ栽培

水稲を中心に+園芸作物で経営の発展を目指す

能登の農地を守る営農活動

北能産業株式会社（能登町）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 後継者のUターンを機に、2013年、農業分野に参入。
- ◆ 地域の水田農業を継承し、農閑期の所得確保のためサトイモの栽培・加工にも取り組む。
- ◆ 現在の経営規模は、水稲37ha、サトイモ2.2ha、育苗ハウス2棟でぶどうを栽培。
- ◆ 主な労働力は、従業員が5名、農繁期に2名をパート雇用。



代表取締役 福池 功

これまでの課題に対する対応

- ◆ 地域の水田を守るために、農業部門を設立し営農を始めたが、年々耕作面積が増加したことから、農閑期の作業と所得を確保するためサトイモ栽培を開始した。
- ◆ サトイモは連作できないことから、翌年には水田に戻すが、このことが、地元を離れている農地の所有者にとって、「いつでも戻って米を作れる」という安心感に繋がっている。
- ◆ 石川県内にはサトイモの産地が少なく、生鮮の他、一時加工品（皮むき処理をしたもの）の需要が多いため、皮むき機や真空パックができる機器を整備し、農閑期の所得を確保している。



さといも収穫作業



さといも選別作業



さといも

今後の展望等

- ◆ 実需者からは、「見た目」にもこだわった加工品の要望が多いので、様々なニーズに対応した商品開発を行っていきたい。
- ◆ 地域の水田を守るため、当社が作成した栽培マニュアルを地域の稲作農家に広め、農閑期の所得確保に貢献したい。



さといも加工品

（令和4年2月）

水稲と施設園芸の複合経営

チンゲン菜のハウス栽培で収入確保

有限会社アグリタウン（宝達志水町）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 育苗ハウスの活用と冬期間の収入確保を目的に、平成18年から園芸作物栽培を開始。
- ◆ 現在の経営規模は、水稲35ha（うるち米25ha、もち米10ha）、ハウス50棟において、チンゲン菜延べ2.5ha（50a×5回転）のほか、わずかではあるが、ほうれんそうとミニトマトを栽培。
- ◆ 主な労働力は、従業員4名、通年のパート従業員6名。



50棟におよぶハウス群



ハウス内のチンゲン菜

これまでの課題に対する対応

- ◆ チンゲン菜は寒さに強いので、ハウスで栽培すれば、加温しなくても年間約5回の収穫が可能で、かつ、保冷库を所有しているため、夏期においても品質を良好な状態に保ち、年間を通して高品質な農産物を出荷している。
- ◆ チンゲン菜の栽培には、自家の粳穀や米糠、近隣農家から出る屑大豆等を利用し、自家で製造したぼかし堆肥を使用した土づくりを行っている。

チンゲン菜の箱詰め作業

保冷库により高品質を確保

今後の展望等

- ◆ 施設園芸での規模拡大及び収益性の高い他品目の栽培も挑戦していきたい。
- ◆ 実需先の要望に応え、品質の良い作物を供給していく。



丼サイズにピッタリのチンゲン菜もあります

（令和3年11月）

水稲と畑作物の複合経営

白ねぎ栽培で定期的な収入を確保

株式会社ヤマジマ（白山市）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 12集落の300戸を超える農業者から出資金を募り、平成14年に(株)ヤマジマを設立。
- ◆ 市場価格が高値で安定し、単収2トン以上が見込める「白ねぎ」に着目して導入。
- ◆ 現在の経営規模は、白ねぎ3.5ha、麦・大豆40ha、水稲25ha。
- ◆ 正社員5名、農繁期に登録パート者から雇用。



代表取締役 亀田さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 多品目でなく「白ねぎ」に絞って栽培技術を確立。
- ◆ 冬期の作業があることで、年間の雇用が図られた。
- ◆ 水稲販売収入がない月の売上に貢献。
- ◆ 市場との信頼関係を重視する観点から、選別は厳しく行っている。
- ◆ 市場出荷のほか、ラーメン店や焼き肉店へ出荷販売。その他、配送や包装作業が省略できる近隣の消費者にも販売。



白ねぎの選別作業



出荷前の白ねぎ

今後の展望等

- ◆ ねぎ集出荷施設の竣工を契機として、栽培面積を拡大するとともに、複数品種の導入や新たな栽培技術の習得で、年間を通じた出荷・販売を目指す。
- ◆ 地域の若手農業者育成への貢献を図る。



令和5年3月竣工された
ねぎ集出荷場

需要を重視し「かぼちゃ」の生産に意欲

2本蔓仕立ての同一方向伸長により収穫位置を固定化

農事組合法人たなかふぁーむ（七尾市）

水稲以外の主な園芸作物等



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 野菜の産地化を目指すため需要がある「かぼちゃ」に着目し、令和3年産から栽培を開始。令和5年度に発足したJAのかぼちゃ部会で会長に就任。
- ◆ 水田面積18.9ha、うち飼料用米7.2ha、かぼちゃ70a、中島菜等20aを栽培。
- ◆ 主な労働力は、法人構成員3名のほか臨時従業員3名。



代表理事の田中氏

これまでの課題に対する対応

- ◆ 初年度は、蔓の伸長を自然任せにしたため収穫作業に苦慮。2年目から2本蔓仕立て（親蔓1本、子蔓1本）にし、同一方向に伸長させ収穫位置を一定範囲内に集約することで収穫作業を効率化。
- ◆ 品質と安定収量確保のため、人工授粉を実践。
- ◆ 主体である加工用の出荷作業は、契約先が用意した鉄コンテナに収納し集荷施設へ搬入して完了となるため、作業時間と箱代等の経費が削減。
- ◆ 地域の消費者に対しては、規格外品等をカットした商品を販売し、良食味であると一定の評価を獲得。



広めの畝幅を確保した定植作業の様子



人工授粉して実がついた様子。

今後の展望等

- ◆ 高価格による取り引きを実現させるため、ブランド化を図っていく。
- ◆ JAかぼちゃ部会の発足を機に、取り組む生産者を広げ産地化を進めていく。
- ◆ 地域の消費者からの求めに対応できるような生産・販売体制を図っていく。



収穫物は鉄コンテナで搬入

「加賀丸いも」と水稲の複合経営 南加賀地区丸いも生産協議会でGI産品登録

有限会社 岡元農場（能美市）

水稲以外の主な園芸作物等

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 水稲単作による経営リスク分散のため、水稲の主要な作業時期と重複せず、収益性も高く、能美市の地域特産物である「加賀丸いも」を平成5年から導入。
- ◆ 加賀丸いもはソフトボール大の丸い形のやまといもで、強い粘りが特徴。
- ◆ ベテラン農家でも丸いもの特徴である丸い形に育てるのは難しく、また、皮が薄くて表面が傷つきやすく手作業も多いため、省力化していくことが課題。



※イラストはイメージです



- ・ 経営規模
水稲35ha 加賀丸いも0.8ha
- ・ 主な労働力
家族3名 雇用者2名

これまでの課題に対する対応









- ◆ 棚づくりをはじめとした栽培労力の短縮に向けて、高畝成形機を開発し、雑草抑制や乾燥防止になる白色ビニールマルチを活用して、労働時間を約7割削減に成功。
- ◆ 連作障害を防ぐため、丸いも1年、水稲2年のローテーションを堅持。これにより、土壌病害やセンチュウの発生を抑制。
- ◆ 丸いもの魅力を引き立てる料理レシピをホームページで紹介。

今後の展望等

- ◆ 自社ホームページやSNS、自社マスコットキャラクター「おこめくん」「まるいもちゃん」を活用した販売戦略を展開。
- ◆ パッケージやラベル等を自社開発し、玄米粉、本みりん「のみりん」、加工品販売を充実。
- ◆ 経営分析とドローンを活用した省力化を図る。



自社マスコットキャラクターを活用した商品

- ◆ 水稲と園芸作物の複合経営を家族経営で実践
地域に根差して生産から食育活動まで幅広く取り組む
霧光雄氏（敦賀市）  p. 1
- ◆ 農福連携を活用して雇用と収益の確保
イチゴの観光農園を通じた集客と販路拡大
有限会社あわら農楽ファーム（あわら市）  p. 2
- ◆ 水稲と施設園芸の複合経営 スマート農業を導入する先進的経営体
株式会社ef（坂井市）  p. 3
- ◆ 通年雇用を目指した水稲と園芸との複合経営
スイートコーンを中心に複数の野菜を生産
農事組合法人吉野ホタルの里ファーム（永平寺町）  p. 4
- ◆ 水稲と大規模施設園芸の複合経営
通年において青ネギ水耕栽培による収益確保
合同会社はなひな農園（若狭町）  p. 5
- ◆ 奥越地方における高収益物作物の推進
JAと県の支援により「さといも」の生産拡大を目指す
JA福井県奥越基幹支店  p. 6
- ◆ 露地とハウス栽培を組合せ通年出荷に成功栽培作物（白ネギ）を絞ることで、
週休二日の働き方を可能に
小西農園（福井市）  p. 7
- ◆ 中山間地域において水稲と水田園芸の複合経営を実施 露地栽培にて白ネギ、
キャベツ（加工用）等の生産
能登野里山営農組合（若狭町）  p. 8

水稲と園芸作物の複合経営を家族経営で実践

地域に根差して生産から食育活動まで幅広く取り組む

霧 光雄 氏 (敦賀市)

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 米が不作になった場合のリスクの回避及び年間を通じての雇用を創出するため、白ネギやキャベツをはじめとする園芸作物の栽培に取り組んでいる。
- ◆ 福井県が施設園芸の導入を強く推進していたことから、県の指導の下、最初は耐候性ハウスを導入し、トマト栽培に着手。
- ◆ 経営規模は、水稲16ha、露地園芸で白ネギ50a、キャベツ50a、施設園芸でキュウリ、トマト、ホウレンソウ等を1ha栽培。
- ◆ 主な労働力は、夫婦と娘の計3名。



霧さん(ご本人)



園芸ハウス

これまでの課題に対する対応

- ◆ 冬場は一定の積雪はあるものの、露地では白ネギや菜花を、ハウスではホウレンソウやコマツナ等の葉物野菜を栽培し、出荷している。
- ◆ 特に冬場の野菜出荷は収益を確保するために、最も需要が高まる時期に合わせて収穫時期を調整している。
- ◆ 年間最大で1ha分の稲のはさがけに取り組み、付加価値を付けて販売するほか、収穫後の米を粳の状態ですべて貯蔵し、注文が入り次第粳摺りすることで高鮮度での販売を行っている。



キャベツの移植機



キュウリのハウス栽培

今後の展望等

- ◆ 当面は現状維持の予定だが、敦賀市で実施されている土地改良事業を契機に、分散しているほ場を集約し、作業の効率化を図りたい。
- ◆ 安心・安全の農産物作りを心掛け、地域の子供たちへの食育活動も引き続き取り組んでいく。



収穫前のキュウリ

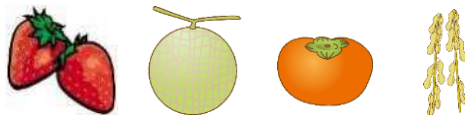
(令和3年7月)

農福連携を活用して雇用と収益の確保

イチゴの観光農園を通じた集客と販路拡大

有限会社あわら農楽ファーム（あわら市）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 坂井北部丘陵地が広がっており、畑地での収益の向上と利用者の冬場の仕事の確保のために、園芸作物栽培を開始。
- ◆ 平成19年にメロンを、同24年にイチゴを導入し、現在は、水稲80ha、そば65a、大豆1.8ha、露地園芸で甘藷15a、施設園芸でイチゴ10a、メロン10aの複合経営を展開。また、水稲約4haを作業受託。
- ◆ 主な労働力は、従業員6名と、就労継続支援A型事業所「株式会社農楽里」で雇用する12名。
- ◆ 福井県坂井農林総合事務所の指導を受けたほか、岐阜県や愛知県といった県外の先進地を訪問し、現地で栽培技術を学んできた。



有限会社あわら農楽ファーム／株式会社農楽里



観光イチゴ園

これまでの課題に対する対応

- ◆ 安全安心な農産物にするため、可能な限り農薬を散布したくないと考えており、特にイチゴ苗は連作障害やランナー（蔓）生育による病気の発生リスクを抑えるために、自根苗を毎年購入し、移植している。
- ◆ 2月～5月まで観光イチゴ園を開園するため、近隣の森林組合から間伐材等のペレットを購入し、冬場の温度管理に活用している。
- ◆ 「株式会社農楽里」の12名は、年間を通じた施設外就労として様々な農作業や農産物加工に従事。



乾燥調製施設

今後の展望等

- ◆ イチゴ栽培面積拡大に向けて農地を確保し、ハウス増設やスイーツ作り体験施設の設置を検討している。
- ◆ 観光農園等の取組を通して、集客と他の農産物の販路拡大に引き続き繋げていく。
- ◆ 年々増える作業受託依頼に応えるため、スマート農機の整備をさらに進めたい。



自動草刈り機

(令和5年11月)

水稲と施設園芸の複合経営

スマート農業を導入する先進的経営体

株式会社ef（坂井市）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 冬場の仕事と収入確保のために福井県内でいち早くイチゴを導入し、水耕高設栽培で栽培している。
- ◆ 北陸ではイチゴの栽培事例はほとんどなかったことから、太平洋側のイチゴ農家を訪問し、栽培技術を学んだ。その後、福井県農林総合事務所の支援を受けながら、イチゴを本格的に導入。
- ◆ 現在は、水稲20ha、大麦・大豆・そばで10ha、白ネギ1.5ha、ハウスイチゴ3棟の複合経営を実践。
- ◆ 主な労働力は、家族5名とパート1名の計6名。



株式会社efの皆さん



定植に向けた準備

これまでの課題に対する対応

- ◆ 長年家族経営で取り組んできたが、自社農産物のブランド化のため、平成30年に法人化に踏み切った。
- ◆ 平成30年の法人化と同時に次女が就農、令和元年には長女が就農し、現在は田植え作業と白ネギの栽培管理を中心に任せている。
- ◆ 経験が浅く、力仕事が苦手な女性でも取り組みやすいよう、GPS付き田植機・トラクタやドローン等のスマート農業を積極的に導入。



定植前のイチゴ苗



収穫前の白ネギ

今後の展望等

- ◆ 現在の経営規模を維持しながら、高収益の確保に向けて栽培管理を徹底したい。
- ◆ 今後、イチゴに加え、新たな園芸作物の導入に挑戦したく、省力化のための機械の導入を検討中。
- ◆ 「当社が作った」農産物として様々な作物のブランド化を進めていきたい。



ドローンによる施肥作業
(令和5年11月)

通年雇用を目指した水稲と園芸との複合経営

スイートコーンを中心に複数の野菜を生産

農事組合法人吉野ホタルの里ファーム（永平寺町）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成18年に5集落が合併し法人化したことが、水稲単作では経営的にリスクがあったことと、通年雇用を実現することを理由に、平成25年から耐候性ハウスを導入し、園芸作物の栽培を開始。
- ◆ 現在の経営規模は、水稲35ha、小麦17.5ha、そば17.5haに加え、露地園芸でスイートコーン、キャベツ、カボチャ計80a、施設園芸でスイートコーン、おり菜、芽キャベツ、ミニ白菜、カリフラワー、オクラ、トマト計22.5aの複合経営を展開。
- ◆ 主な労働力は、役員3名とオペレーター2名で、農繁期には各集落から約30名が参加。



農事組合法人
吉野ホタルの里ファーム



オクラのハウス栽培

これまでの課題に対する対応

- ◆ 施設園芸については、担当者を置き、栽培管理から収穫まで任せている。
- ◆ コスト低減のため園芸作物については全て種子から栽培し、それぞれ複数の品種を扱っている。
- ◆ 主にJAの営農指導員から技術指導を受け、栽培品目の選定も行っている。
- ◆ 冬場はおり菜、ミニ白菜の収穫を中心に行っている。



収穫前のオクラ

今後の展望等

- ◆ 特産品であるスイートコーンを中心に、園芸作物の生産量増加による収益確保に努めていきたい。
- ◆ トマトのバッグ栽培は猛暑の影響で収量減となったが、栽培方法に手ごたえを感じており、今後の収量増を期待。
- ◆ 土壌診断を導入。診断の結果を受け、堆肥やもみ殻の散布による土壌改善を実施予定。



移植前のキャベツ苗



トマトのバッグ栽培
(令和5年11月)

水稲と大規模施設園芸の複合経営

通年において青ネギ水耕栽培による収益確保

合同会社はなひな農園（若狭町）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成14年に夫婦で就農し、当初は水稲と借用ハウスや露地で園芸を営む小規模経営でのスタート
- ◆ 平成27年にJAによる大型園芸ハウスのリース事業の採択を受け、本格的に大規模施設園芸を開始し、青ネギの水耕栽培と水稲の複合経営を展開。
- ◆ 現在は、大型鉄骨ハウス10棟(50a)で青ネギ、パイプハウス6棟でミディトマト、ホウレンソウを生産、水稲は7haですべて直播栽培。
- ◆ 主な労働力は、夫婦と社員1名、パート4名の計5名。



大型鉄骨ハウス



青ネギ水耕栽培

これまでの課題に対する対応

- ◆ 作業効率を上げるため夫婦で作目ごとに責任分担を決め、社員とパートを活用し通年での生産体制を確立している。
- ◆ ハウス内作業は細分化されているが、現在8年目をむかえ全員が作業内容を熟知できており、午前中の限られた時間内での作業が可能。
- ◆ 青ネギについては、収穫後無調整でJA出荷を行うことで、手間と経費の省力化を図る。その分出荷の回転や生産量の増加で収益を確保。



青ネギ定植用苗



青ネギ収穫作業

今後の展望等

- ◆ 収益面で限界に来ていることから、販路開拓も兼ねて施設園芸での規模拡大、収益性の高い品目へも挑戦していきたい。
- ◆ 今後は農福連携による労働力確保や社会福祉への貢献も視野に入れ生産活動を行う。



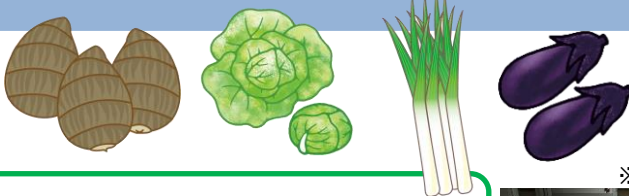
出荷用コンテナ

奥越地方における高収益作物の推進

JAと県の支援により「さといも」の生産拡大を目指す

JA福井県奥越基幹支店

水稲以外の主な園芸作物等



さといも産地化までの経緯等

- ◆昭和50年代から減反政策の対応作物としてさといもが多くつくられるようになり、「奥越のさといも」として親しまれてきた。
- ◆管内旧JA（上庄、大野、勝山）の頃は産地間競争が行われていたが、JA広域合併後は「上庄さといも」「越前さといも」の2ブランドで奥越の特産物として販売されている。地元福井市場をはじめ、中京・関西方面の市場にも出荷している。
- ◆「上庄さといも」は平成29年にGI登録が行われた。
- ◆物産展でのPR等、奥越さといもの知名度が上がるよう販売促進活動に力を入れてきた。

※ イラストはイメージ



さといもの選別作業

これまでの課題に対する対応

- ◆高齢化により、栽培農家・面積が年々減少。県は「園芸タウン構想」を策定し、技術支援、機械の購入補助を行うなど、中核農家の育成や、さといもの栽培面積の維持、拡大を目指している。
- ◆令和元年にさといも疫病が発生したが、試験を実施した結果、対処法がわかってきた。現在は収穫までに平均4~5回の防除を実施している。
- ◆生産者の所得確保のためにカタログ通販やJAタウン、楽天など直売率向上に取り組んでいる。また、付加価値の高い冷凍さといもへの加工を行っている。
- ◆過去に、市場からもっと丸い芋が欲しいという要望があったため、行政と連携して種芋の系統選抜を行い、現在の丸い芋ができる系統に切り替えた。
- ◆大野市の「農事組合法人アバンセ乾側」ではさといもを2ha栽培している。収穫から調製・出荷までの作業量が多いことから、さといも生産拡大のために必要な作業時間・作業人数のシミュレーションを実施しながら栽培面積を拡大。また、さといもにあう圃場の見極めも行っている。
- ◆生産拡大には掘取後の手作業で行われている調製作業が課題。機械化を含めて対応策を検討中。

今後の展望等

- ◆加工設備の能力を增強し、付加価値が高い冷凍さといもの加工数を増やす。
- ◆掘取後の株のままの出荷体制の構築や調製作業の機械化等により栽培面積を拡大。



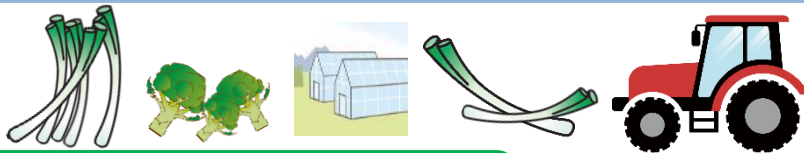
収穫作業

露地とハウス栽培を組合せ通年出荷に成功

栽培作物（白ネギ）を絞ることで、週休二日の働き方を可能に

小西農園（福井市）

主な園芸作物等



園芸作物導入の経緯等

- ◆白ネギ 7 ha(7月～翌年5月収穫)、ブロッコリー30～40a(6月収穫)
- ◆地区内で祖父の代から続く水稲を中心とした農家だったが、令和元年に集落営農組織が立ち上がったことをきっかけに自作地を委託し、集落営農組織が営農するブロックローテーションの比較的水はけの良い白ネギに適した圃場を借り受けるようになった。
- ◆白ネギは、ほかの野菜に比べて栽培期間が長く、機械化体系も構築されているため、計画的な栽培もでき、日々の作業に追われることが少ないことに注目した。



広大な白ネギの圃場



収穫機による収穫作業
2名体制で可能

これまでの課題に対する対応

- ◆ブロックローテーションの一角で栽培することで連作障害による減収が回避できた。
- ◆水稲と野菜数種類での営農は日々の作業に追われたが、作物を絞ったことで白ネギ栽培に集中できるように。また、畝間を通常より広くしたことで機械化による省力化が進んだ。
- ◆栽培状況や作業の進捗管理を共有するため、定期的にランチミーティングを実施することで効率的な作業運営が可能に。
- ◆その結果、家族経営から雇用型経営に転換し、経営者及び雇用者全員の週休二日制を実現。当農園への若手の雇用に繋がった。
- ◆冬場でも契約どおり出荷するため、ハウスを活用した栽培を開始。販売先との信頼関係の構築に繋がり有利に販売。
- ◆SNSを活用して他産地の農業者と連携することで、課題等の共有を図り、解決の糸口になることも。



ある程度の泥を落とし一定量をまとめる



この後調整施設へ運搬

今後の展望等

- ◆栽培面積を拡大し、出荷量を増やす。
- ◆障がい者施設にて働いた経験を持つ職員を中心に、農福連携に取り組み、労働力を確保する。
- ◆人口減少に伴う国内消費量の低下に対応すべく、将来的には輸出に取り組みたい。



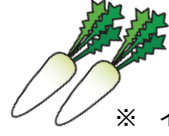
園主の小西大作さん

中山間地域において水稲と水田園芸の複合経営を実施

露地栽培にて白ネギ、キャベツ（加工用）等の生産

能登野里山宮農組合（若狭町）

水稲以外の主な園芸作物等



※ イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 集落の高齢化、後継者不足、農地維持の課題が深刻化したことにより、地域の受け皿として平成20年に集落営農組織を設立。
- ◆ 中山間地域のため経営面積は小規模（水稲11ha、白ネギ1.3ha、キャベツ1.8ha、その他0.9ha）であり、収益確保のため、農業機械等を整備し、白ネギ、後にキャベツ（加工用）の栽培を開始。
- ◆ 棚田地形のため、圃場は1筆あたり10a区画が平均的であり、大型機械は使用できず作業効率も良くないため、定植や防除、畦畔の除草等について極力機械化を図り、集落全体で協力しながら生産活動を行っている。



棚田栽培の白ネギ圃場



キャベツ圃場

これまでの課題に対する対応

- ◆ 圃場条件は良くないが、高低差のある棚田を利用した額縁明渠による表面排水対策や、集落営農組織（構成員40名）内で労働力の確保ができることが大きなメリットであり、高齢者が働く機会と集落の活性化に繋げている。
- ◆ 複合経営であるが、水稲と水田園芸については、栽培や圃場管理を分担化して、双方の作業に重複が生じないようにしている。
- ◆ 野菜の販路はJA販売が中心であるが、規格外等の品はファーマーズマーケットや近隣の市場販売も行っており、近年は干し大根の民宿販売も行い販路拡大や収益確保に繋げている。また、集落内には野菜・花きの無人販売所も設置して好評となっている。
- ◆ さつまいもの体験農園を運営しており、学童等の農業体験による食育や地域貢献にも繋がっている。



集落内の無人販売所



農道・畦畔の除草機

今後の展望等

- ◆ 経営の安定を図るため法人化を予定しており、生産事業の強化また、従来の集落営農組織を当面存続し、多面的機能支払制度や中山間地域等直接支払制度を活用した農地保全事業を行う二階建て集落体制の構築を図る。
- ◆ 法人化後に町内の農業研修機関より研修生1名を雇用予定であり、将来の後継者として育成していく。



集落営農組織役員
(令和5年11月)